

# “x as ... as y” 構文の意味論と語用論

澤 田 治 美

(関西外国語大学外国語学部 教授)

---

松 山 大 学  
言語文化研究 第38巻第1 - 2号 (抜刷)  
2018年9月

Matsuyama University  
Studies in Language and Literature  
Vol. 38 No. 1-2 September 2018

# “x as ... as y” 構文の意味論と語用論\*

澤 田 治 美†

## 1. はじめに

次のような “x as ... as y” 構文は、一般に「x は y と同じ（くらい）」であると解釈されている。

(1) John is *as tall as* Bill.

(ジョンの身長はビルと同じ（くらい）だ)

しかし、この解釈で十分であろうか。

1970年代前後には既に、この解釈では十分でないことが指摘されていた。例えば、Campbell and Wales (1969) や Bolinger (1972) は、以下のような例を挙げて、「x と y の程度が全く同じ」ではなく、実際には、「x の方が y よりも程度が上」になり得ると述べている。

(2) a. John is *as rich as anyone* here.

b. John is *at least as tall as* Bill.

(Campbell and Wales (1969 : 241))

(3) Mary is *as tall as* Jane, maybe taller.

(Bolinger (1972 : 28))

---

† 関西外国語大学外国語学部 教授

「x と y の程度が同じ」と解釈した場合, (2a) (=誰にも負けないほど金持ちだ), (2b) (=ジョンの身長は少なくともビルほどはある), (3) (=メアリーの身長はジェーンほどはある, もしかするともっと高いかもしれない) が自然に説明できない。

本稿の目的は, “x as ... as y” 構文の意味は, 「x は y と同じ (くらい)」ではなく, 「x は (少なくとも) y ほどはある」であり, 尺度的な表現として, x の程度は高く (もしくは, 肯定的に) 捉えられていることを論じ, 英語の授業への役立て方について示唆することである。

## 2. “x as ... as y” 構文の構造

はじめに, “x as ... as y” 構文の構造について素描しておきたい。以下の例は典型的な “x as ... as y” 構文である。

- (4) a. Mary is *as tall as* Jane (is).  
 b. This box is four times *as heavy as* that one (is).

ここでは, 主に Bresnan (1973), Huddleston (1984), Huddleston and Pullum (2002), 澤田 (2014: 137ff.), Rett (2015) その他に沿って, 以下の点を想定する。

- (5) ①二つの *as* のうち, 主節の *as* は形容詞・副詞の「程度」を標示する程度詞 (Deg) (伝統的には, 指示副詞) であり, この *as* の後ろには, 程度性のある形容詞・副詞しか生起できない。  
 ②程度詞の *as* は “four times” (4倍), “half” (半分) などの数量詞 (QP) によって修飾されることがある。

- ③従属節の *as* は補文標識 (=COMP) (伝統的には、接続詞) であり、(何と比べるのかという) 比較の基準となる事柄、すなわち「比較節」を従えている。
- ④比較節の中にも、主節と同じように、必ず、形容詞・副詞がある。ただし、それは「目に見えない程度詞」成分 (ここでは、*d* と標示する) を含んでいる。
- ⑤比較節の中の形容詞・副詞句 (=AP) は、主節のそれと同一である場合には、「比較削除」(comparative deletion) という規則によって、義務的に削除される。

これらの点を、上の(4)の例で確認してみよう。

第1に、主節の *as* は程度詞とみなすことによって、次のように解釈される。

- ①(4a)の *as tall* の *tall* は「高い」ではなく、「高さ」である。「高さ」である以上、実際には、高くなくても (=低くても) 許される (例えば、『グリム童話』の「白雪姫」に出てくる7人の小人たちについても言える)。ただし、もし *as short* であれば、「低さ」であり、「低さ」である以上、低いことが要求される。
- ②(4b)の *four times as heavy* の *heavy* は「重い」ではなく、「重さ」と解釈される。

以下の例から、*{taller / shorter} than* と *as {tall / short} as* の違いが明確となる。

- (6) a. Doug is *taller than* Adam, but they're both *short*.  
 b. Doug is *shorter than* Adam, but they're both *tall*.
- (7) a. Doug is *as tall as* Adam, but they're both *short*.  
 b. \*Doug is *as short as* Adam, but they're both *tall*.

(Rett (2015: 39-40))

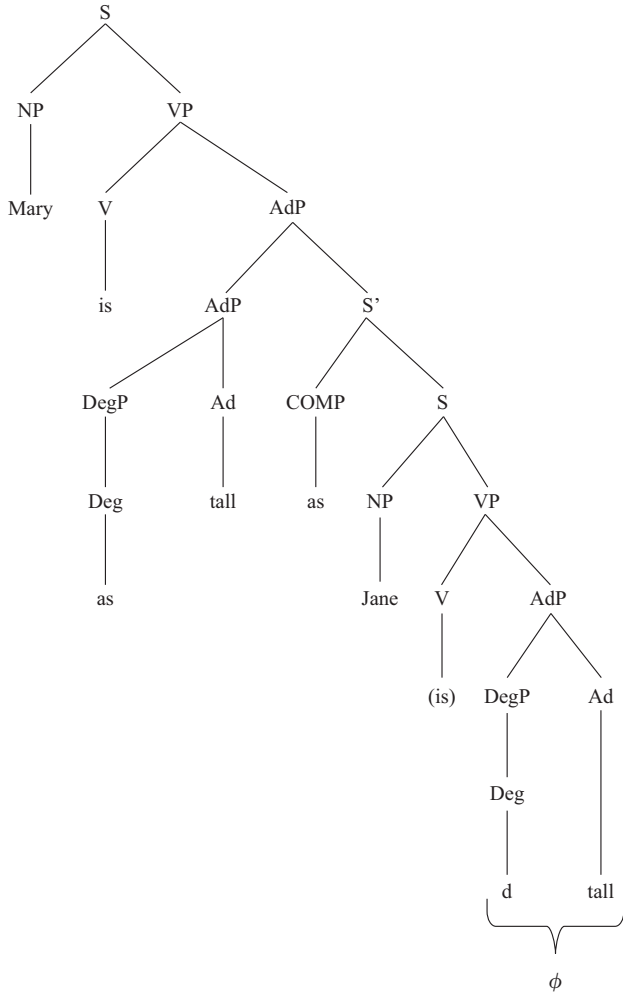
これらの例で、(7b)だけが不適格となる。(6a)-(6b)は「より高い／より低い」(=高低の度合い)なので、相対的である。同じく、(7a)も「...ほどの高さはある」(=no shorter than)(=高低の度合い)なので、相対的である。しかしながら、(7b)は「...ほどの低さしかない」(=no taller than)(=低さの度合い)なので、絶対的である。よって、DougもAdamも背が低いことが要求され、(7b)は不適格とならざるを得ない。

第2に、比較節のasは補文標識であり、次のように解釈される。すなわち、(4a)のas節は“Jane is d-tall”(=ジェーンはある背の高さがある)であり、(4b)のas節は“that one is d-heavy”(=あの箱はある重さがある)である。

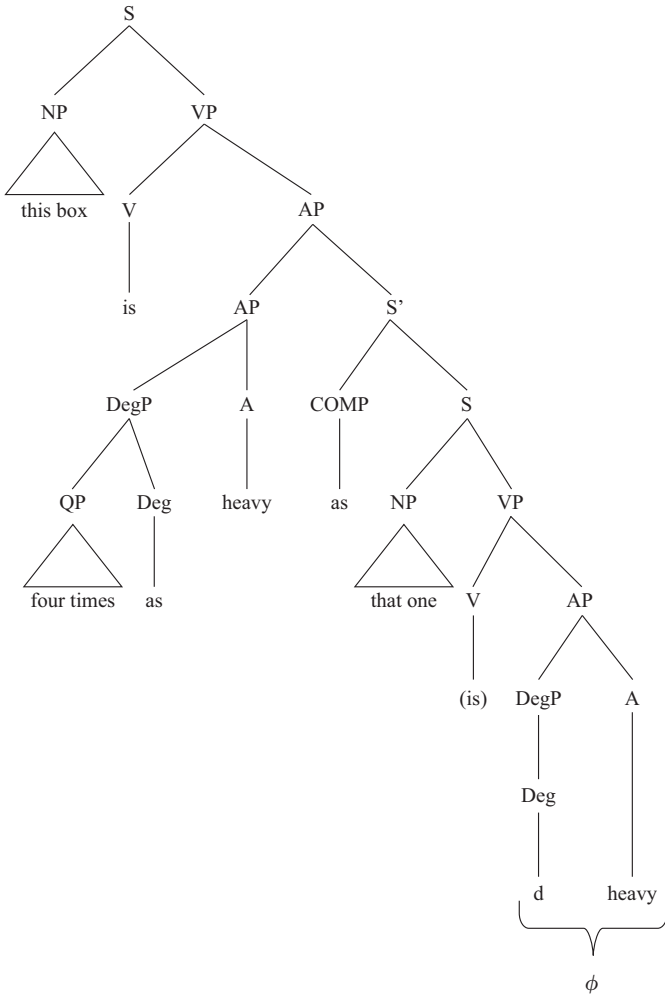
第3に、「比較削除」に関して言えば、(4a)の比較節の中のtallは主節のtallとの同一性の下で義務的に削除されており、(4b)の比較節の中のheavyも主節のheavyとの同一性の下で義務的に削除されている。

以上のことを視覚的に理解するために、構造を樹形図で表示しておきたい。

(8)



(9)



### 3. “x as ... as y” 構文の意味

従来、「同等比較」を表す“x as ... as y”構文は、 $x=y$ （もしくは、 $x \doteq y$ ）という関係を示すとされることが多かった。すなわち、二つの as のうち、主節の as は「...と同じ（くらい）」を意味するとみなされている。中学・高校の英語テキスト、英和辞書、用例辞典などでも、「...と同じ（くらい）」と説明されるのが一般的である。例えば、文部科学省検定済教科書 中学校外国語科用英語教科書 *New Crown* ② *English Series New Edition*（三省堂、2017）の Lesson 7（文法のまとめ）では、「同等比較」として、次のように述べられている（p. 97）。

- (10) 「...と同じくらい〜」と程度が同じことを言うときは、〈as + 形容詞 + as ...〉で表します。

My bag is as big as yours.

そして、この例文の意味は以下のようなものとされている（p. 133）。

- (11) 私のかばんは、あなたのもと同じくらい大きいです。

さらに、英和辞典でも、基本的に事情は同じであり、「...と同じ（くらい）」と説明されている。

- (12) Carol is as old as {I (am)/ me}. (キャロルは私と同年だ。)(=  $\doteq$  Carol is the same age as {I (am)/ me}. (『ウィズダム英和辞典』(初版))
- (13) He is as tall as you. (彼は君と身長が同じだ。)(『小学館プログレッシブ英和中辞典』(第3版))

本稿では、しかしながら、Huddleston (1984: 407), Rusiecki (1985: 143-



144), 八木 (1987: 122-124), Mitchell (1990: 60), Huddleston and Pullum (2002: 1101), 澤田(2014: 143ff., 2018b: 17ff.), Rett(2015), Larsen-Freeman and Celce-Murcia (2016: 782) などに従って, “x as ... as y” 構文の本質的意味を次のように捉える。

- (14) “x as ... as y” は,  $x=y$  (もしくは,  $x \doteq y$ ) ではなく,  $x \geq y$  という関係を表している。

換言すれば, (15)である。

- (15) “x as ... as y” は, 「x の...の程度は y の...の程度と同じ (くらい)」ではなく, 「x の...の程度は (少なくとも) y の...程度ほどはある」という捉え方を表している。

Huddleston (1984: 406-407), Rusiecki (1985: 144), Mitchell (1990: 60) は, “as tall as” は, “no shorter than” (=低くはない/高さで劣ることはない) と同値であるとみなし, “x as ... as y” は  $x=y$  ではなく,  $x \geq y$  と標示されると述べている。Huddleston and Pullum (2002) も同様な指摘をしている。

- (16) 基本的に, 同等性の尺度的比較は「少なくとも同等である」(“at least equal”) と解釈され, 「ちょうど同じ」(“exactly equal”) と解釈されることはない。

(Huddleston and Pullum (2002: 1100))

このように分析するならば, (10)の “My bag is as big as yours.”, (12)の “Carol is as old as {I (am)/ me}.”, (13)の “He is as tall as you.” は, それぞれ, (17), (18), (19)のように解釈されることになる。

- (17) 私のかばんの大きさは、あなたのものほどはある（二つのかばんは大きいとは限らない。“My bag is *as big as* yours, but they’re both *small*.” / “My small bag is *as big as* yours.” と言えるからである）。
- (18) キャロルの年齢は私ほどは知っている（二人は年老いているとは限らない）。
- (19) 彼の身長は君ほどはある（二人は背が高いとは限らない）。

さらに、(15)の捉え方によれば、以下のような例で、

- (20) a. Nancy earns *twice as much money as* her husband.  
 b. The population of this city is *five times as large as* that of my home town.

(荒木（編）（1997：129-130））

(20a)は、「ナンシーは夫の2倍お金を稼ぐ」ではなく、「ナンシーは（少なくとも）夫の2倍はお金を稼ぐ」と解釈され、(20b)は、「この市の人口は私の故郷の人口の5倍だ」ではなく、「この市の人口は（少なくとも）私の故郷の人口の5倍はある」と解釈される。なぜなら、以下の例からわかるように（if not = もしかすると）,

- (21) a. Michael is *twice as tall as* his son is, *if not taller*.  
 b. \*Michael is *twice as tall as* his son is, *if not shorter*.

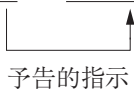
(Rusiecki (1985: 154))

マイケルの身長は息子の身長の2倍よりも高い可能性があるが、一方、低い可能性はないからである。

では、*as*の本質の意味とは何であろうか。ここで筆者が想定していること

は, “x as ... as y” の二つの as のうち, 主節の as は比較節の as に続く事柄の程度がどれほどなのかを予告的に指示する働きをしており, 比較節の as は比較の基準となる事柄の程度・度合 (すなわち, 「...ほど」) を具体的に示しているということである。例えば, メアリーがその場にはいない時に, 彼女の服を注文しようとして, 彼女の身長を話題にしたとする。A が「メアリーの身長はどれくらいかな?」と聞いたとき, B が「(少なくとも) ジェーンほどはある」と答えたでしょう。このような場合, 英語では, 二つの as を相関的に用いる。このことは以下のように示される。

(22) Mary is as tall as Jane (is).



予告的指示

(22)において, 主節の as の働きは, 代用形 so に似た働きをし, 比較節の as は「...ほど」のようにジェーンを「ひきあい」に出す働きをしている。この点に関して, (i) “x as ... as y” が否定文になると, as の代わりに so が用いられてもよいこと, (ii) ドイツ語の同等比較文では, 英語の so に相当する so が用いられることが示唆的である。

(23) He's not {as / so} friendly as she is.

(Swan (2005<sup>3</sup>: 113))

(24) Ich bin so groß wie du.

I am as tall as you.

## 4. “x as ... as y” 構文に関する注意すべきポイント

### 4.1. 「付け足し」表現

第1のポイントは，“x as ... as y” 構文の後ろに生起する「付け足し」表現からもたらされる。以下の例を見てみよう（in fact=実はより正確に言う）。

- (25) a. Mary is *as tall as* her father.  
 b. Mary is *as tall as* her father. In fact, she's taller than him.  
 c. \*Mary is *as tall as* her father. In fact, she's shorter than him.

(Mitchell (1990: 59))

(25)の3例に関して、Mitchell (1990)によれば、(25a)は、かならずしも「メアリーはジェーンと同じ背の高さだ」とは解釈できず、高さは上のレベルに上がってもいいが、下のレベルに下がってはならないという。換言すれば、主語のメアリーは「肯定的に」(=上向きに)捉えられなければならない。それゆえ、(25b)は適格であるが、(25c)は不適格となる。すると、上の3例は、それぞれ、次のように解釈されなければならないことになる。

- (26) a. メアリーの身長は、(少なくとも)お父さんほどはある。  
 b. メアリーの身長は(少なくとも)お父さんほどはある。実はより正確に言うと、もっと高い。  
 c. \*メアリーの身長は(少なくとも)お父さんほどはある。実はより正確に言うと、もっと低い。

(26)の日本語で、「ほどは」の「は」が重要である。この「は」は、「対比」ではなく、「話題」を標示していると思われる。これが付くことによって、メアリーの身長はジェーンと同じか、彼女より高いという意味合いが伝わる。例え

ば、100点満点の期末試験で、60点以上取らないと不合格だという決まりがあったとしよう。相手から、「試験は何点だった?」と聞かれて、「60点は取ったよ」と答えたら、60点より高かった可能性もある。「60点は取った」は、「60点くらい取った」と同義ではない。後者の場合、前者と違って、60点以下の場合もあるからである。また、「60点取った」の場合の「60点」は、「何点だったのか」という質問に対して「焦点的」に答えているのに対し、「60点は取った」の場合の「60点」は、「何点だったのか」という質問に対して「尺度的」(もしくは、レベル的)に答えているにすぎない。それは、(要求された)「60点」というレベル(=条件)をクリアしたという意味になる。それゆえ、「60点」については、(27)におけるように、二つの捉え方があると言えよう。図1参照。

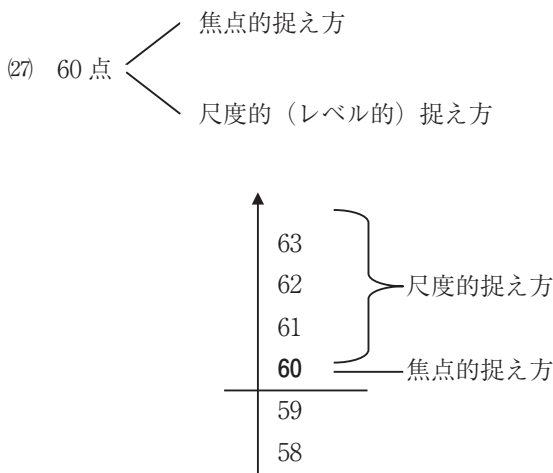


図1 60点に対する焦点的捉え方と尺度的捉え方

こうした観点から、以下の例を解釈してみよう。

(28) Applicants should be *6 feet tall*.

(Campbell and Wales (1969: 242))

Campbell and Wales (1969: 242)によると、この例における“6 feet tall”は、①“exactly 6 feet tall”と②“6 feet tall or over”に多義的であるという。この多義性は、「は」を用いて、①「応募者は（ちょうど）6フィートあってほしい」と②「応募者は（少なくとも）6フィートはあってほしい」のように区別可能である。①は「焦点的」であり、②は「尺度的」である!

では、次の例はどうであろうか。ある人が東京から大阪まで数日かけて自転車旅行を計画していたとする。友人から電話で、「初日は、最低でも静岡までは行っていないといけない」と言われ、次のように答えたとする。

(29) 静岡までは行った。

この発話が多義的である。一つの解釈は、以下のようなものである。

(30) 静岡までは行った。しかし、それ以上遠くには行けなかった。

この例では、「は」に対比的強勢が置かれる。

もう一つの解釈は、「静岡までは行っていないといけない」という条件をクリアできたというものである。この場合には、静岡以上に遠くに行ったことを含意している。しかし、この含意は、次の例からは出てこない。

(31) どこまで行ったかと聞かれて：

(ちょうど) 静岡まで行った。

(31)は焦点的に解釈される。

以下の例では、「静岡」が2回繰り返されている。

- (32) (心配しないでいい。) 静岡までは行った。実はより正確に言うと、  
ちょうど静岡までだった。

この場合、「静岡まで」全体が旧情報となり、「は」を用いて話題化されている。前半の文の「静岡」は尺度的な捉え方であり、後半の「静岡」は焦点的な捉え方である。以下の例は、この順序は逆転されてはならないことを示している。

- (33) \*ちょうど静岡まで行った。実はより正確に言うと、静岡までは行った。

後半の文の「静岡」は尺度的な捉え方であり、焦点的な捉え方ではないために、「実はより正確に言うと」と整合しない。

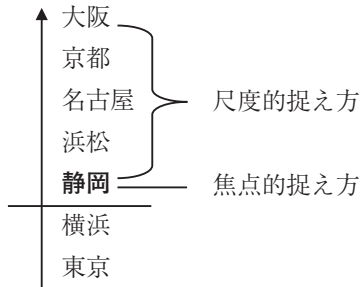


図2 「静岡」の焦点的用法と尺度的用法

“x as ... as y” 構文の場合も同様である。この構文では、x と y の程度が同じか違うかという問題に焦点が置かれているわけではない。すなわち、「焦点的に捉えられているわけではない。そうではなく、x のレベルは y のレベルより

も下ではないという意味で、「尺度的」に捉えられているにすぎないのである<sup>2)</sup>

こうした観点から、以下の例を解釈してみよう。

(34) Applicants should be 6 feet tall.

(Campbell and Wales (1969 : 242))

Campbell and Wales (1969 : 242) によると、この例における“6 feet tall”は、①“exactly 6 feet tall”と②“6 feet tall or over”に多義的であるという。この多義性は、「は」を用いて、①「応募者は（ちょうど）6フィートあってほしい」と②「応募者は（少なくとも）6フィートはあってほしい」のように区別可能である。①は「焦点的」であり、②は「尺度的」である。

“x as ... as y” 構文の場合も同様である。この構文では、x と y の程度が同じかどうかという問題に焦点が置かれているわけではない。すなわち、「焦点的」に捉えられているわけではない。そうではなく、x のレベルは y のレベルよりも下ではないという意味で、「尺度的」に捉えられているにすぎないのである。

#### 4.2. “x as ... as y” 構文の否定形

第2のポイントは、“x as ... as y” 構文の否定形からもたらされる。“x as ... as y” が  $x \geq y$  と記号化されると想定するならば、“x not as ... as y” は  $x < y$  となる。

(35)	肯定	否定
	“x as ... as y”	“x not as ... as y”
	$x \geq y$	$x < y$
	(x は (少なくとも) y ほどはある)	(x は y ほどではない)



$x=y$  ( $x$  は  $y$  と同じである) の否定は  $x \neq y$  ( $x$  は  $y$  と同じではない) となる。よって、以下の例に関して、

- (36) a. Mary is as tall as Jane.  
 b. Mary is identical in height with Jane.
- (37) a. Mary is not as tall as Jane.  
 b. Mary is not identical in height with Jane.

仮に(36a)の意味を(36b)と解釈したとしよう (=「メアリーの身長はジェーンと同じだ」)。すると、(37a)は(37b)と同義であると予測される (=「メアリーの身長はジェーンと同じではない」)。しかし、実際には、(37a)は、「メアリーの身長はジェーンほどではない」であり、(37b)と同義ではない。このことは、「 $x$  as ... as  $y$ 」を「 $x$  は (少なくとも)  $y$  ほどはある」( $x \geq y$ ) と解釈し、その否定版 “ $x$  not as ... as  $y$ ” を「 $x$  は  $y$  ほどではない」( $x < y$ ) と一般化することによってこそ自然に説明可能となる<sup>3),4)</sup>

#### 4.3. “ $x$ as ... as $y$ ” 構文の疑問形

第3のポイントは、“ $x$  as ... as  $y$ ” 構文と “ $x$  the same ... as  $Y$ ” 構文の疑問形からもたらされる。次の質問 (Q) - 返答 (A) を比較してみよう。

- (38) Q1: Is he *the same age as* you?  
 (彼はあなたと同じ年ですか?)  
 A1: No, he's two years older.  
 (いいえ、彼は2歳年上です。)
- (39) Q2: Is he *the same age as* you?  
 (彼はあなたと同じ年ですか?)  
 A2: ??Yes, two years older, in fact.

(はい、実はより正確に言うと、2歳年上です。)

(40) Q3: Is he *as old as* you?

(彼の年齢はあなたほどはいつていますか?)

A3: ??No, he's two years older.

(いいえ、彼は2歳年上です。)

(41) Q4: Is he *as old as* you?

(彼の年齢はあなたほどはいつていますか?)

A4: Yes, two years older, in fact.

(はい、実はより正確に言うと、2歳年上です。)

(Huddleston and Pullum (2002: 1139))

質問 Q1 と Q2 では「彼の年齢はあなたと同じであるかどうか」が、Q3 と Q4 では「彼の年齢はあなたほどはいつているかどうか」が問われている。これら 2 つの質問は同義とは言えない。前者では同い年であるかどうかに関心が当てられているが、後者では、年齢のレベルを満たしているかどうかが問われているからである。上の 4 つの対話のうち、自然な対話は(38)と(41)である。(38)では、「同い年かどうか」と聞かれて、「いいえ、2歳年上です」と答えており、理にかなっている。次に、(39)では、「同い年かどうか」と聞かれて、「はい、2歳年上です」と答えており、「はい」と「2歳年上です」とが互いに矛盾している。また、(40)では、彼の年齢はあなたほどいつているかどうか」と聞かれて、「いいえ、2歳年上です」と答えており、「いいえ」と「2歳年上です」とが互いに矛盾している。なぜなら、「いいえ」とは年下であることを意味しているからである。最後に、(41)では、「彼の年齢はあなたほどいつているかどうか」と聞かれて、「はい、実はより正確に言うと、2歳年上です」と答えており、理にかなっている。

“x as ... as y” を  $x=y$  (もしくは、 $x \doteq y$ ) と解釈する限り、上の事実を自然に説明することはできないであろう。

#### 4.4. “x as ... as any”

第4のポイントは、“x as ... as y”構文の比較節に現れる、いわゆる「自由選択」(free choice)のany(=どんな...でも)からもたらされる。

八木(1987: 122)は以下のような興味深い例を挙げている(話し手は定年間近の郵便収集係である)。

- (42) ... but I can still get round the boxes *as quick as any* of them and quicker than most. (ポストを回る早さじゃまだ仲間の誰にも負けないし、たいていの者よりは早いぐらいだ。)

(八木(1987: 122))

八木(1987: 122)で主張されているように、“x as ... as any”を、「いかなる人とも等しい」と解釈することは不合理である。

Mitchell(1990: 58, 67)によれば、論理的に言って、次の等式が成立する。

- (43) x as tall as y = x no |less tall / shorter| than y

すなわち、「xの身長はyほどはある」とは、「xの身長はyよりも低い(劣)ことはない」である。“x as ... as any”に対しては、この解釈が自然である。

次の例(クリスティー『アクロイド殺害事件』第2章から)でも、“x as ... as any”の構文が用いられている。

- (44) It is not too much to say that for at least fifteen years the whole village has confidently expected Ackroyd to marry one of his housekeepers. *The last of them, a redoubtable lady called Miss Russell, has reigned undisputed for five years, twice as long as any of her predecessors.*

(Agatha Christie, *The Murder of Roger Ackroyd*) (斜体筆者)

斜体部は、「最も新しい家政婦である、ラッセルという名の恐るべき女性がこの5年間絶対に仕切っていたが、その期間は彼女の前任者の誰と比べても(少なくとも)2倍は長かった」と解釈される。

#### 4.5. “as ... as” 構文における「非対称性」

第5のポイントは、“x as ... as y” 構文における「非対称性」に関わっている。

(45) John is as tall as Bill. ( $x \geq y$ )

(46) Bill is as tall as John. ( $y \geq x$ )

(Mitchell (1990: 60))

Mitchell (1990: 60) は、(45)は必ずしも(46)を含意しないと述べている。なぜなら、(45)では、ジョンの方がビルよりも高い可能性があるが、(46)では、ビルの方がジョンよりも高い可能性があるからである。同様に、次の例に関しても、

(47) John isn't as tall as Bill. ( $x < y$ )

(48) Bill isn't as tall as John. ( $y < x$ )

(47)では、ジョンはビルよりも背が低いが、(48)では、ビルはジョンよりも背が低い。仮に“x as ... as y”を $x = y$  (もしくは、 $x \doteq y$ ) と解釈するならば、こうした例を自然に説明することはできない。

## 5. 終わりに

本稿では、“x as ... as y” 構文の意味は、「xはyと同じ(くらい)」ではなく、「xは(少なくとも)yほどはある」であり、尺度的な表現として、xの程度は

高く（もしくは、肯定的に）捉えられていることを論じた。

このことを授業に導入するに際して、以下の対話が示唆的であると思われる。母語話者によれば、メアリーとジェーンの身長を比較する時、(49)のような対話はごく自然であるが、(50)のような対話は不自然であるという。

(49) Q: Who is taller, Mary or Jane ?

(メアリーとジェーンでどちらが背が高いですか?)

A: Mary (is). / Jane (is).

(メアリーです。/ジェーンです。)

(50) Q: Who is taller, Mary or Jane ?

(メアリーとジェーンでどちらが背が高いですか?)

A: ?Mary is as tall as Jane (is). / ?Jane is as tall as Mary (is).

(メアリーの身長は(少なくとも)ジェーンほどはあります。)

(49), (50)の質問Qは、メアリーかジェーンかのどちらが背が高いのかと尋ねているので、その答えは、メアリーかジェーンのどちらかを選択して、「焦点的」に答えなくてはならない。(49)の返答Aは、焦点的であるので適格である。しかしながら、(50)の返答Aは、「メアリーとジェーンは同じ(くらいの)身長です」という解釈にはなり得ず、それゆえ、焦点的に答えたことにならない。その返答は「尺度的」であり、不自然となる。

一方、(51)のような対話ならば自然である。

(51) Q: Who is taller, Mary or Jane ?

(メアリーとジェーンでどちらが背が高いですか?)

A: They're (about) the same (height).

(二人は同じ(くらいの)身長です。)

では, “Mary is as tall as Jane.” が自然であるような対話とはどのようなものであろうか。母語話者によると, 以下の(52)のような対話があり得るといふ。

(52) Q: How tall is Mary?

(メアリーの身長はどれくらいですか?)

A: She’s as tall as Jane.

(ジェーンほどはありますよ。)

この時, 話し手と聞き手の間に, ジェーンの身長についての共有知識がなくてはならない。

最後に, 本稿の分析を応用して, “x as ... as y” 構文が用いられた実例を解釈してみたい。

最初の例は, 高校英語教科書の中の実例である。この話は, 未来のために植物の種の保護・管理がいかに重要であるかを訴えた興味深い読み物である。1922年に一人のイギリス人の科学者がエジプトの王家の谷で古代エジプト王の墓を発見したが, その墓の中に乾燥した豆が幾つか見つかったという。末尾の斜体部は, “x as ... as y” 構文が用いられており, 「それらの乾燥した豆の古さときたら, (少なくとも) その墓自体ほどはあった (もしかするともっと古い可能性もある)」と解釈されよう。

(53) In 1922 an English scientist discovered an Egyptian king’s tomb in the Valley of the Kings, where he found some dried peas, *as old as the tomb itself*.

(斜体筆者) (検定済高校英語教科書 *CROWN English Series II New Edition*) (三省堂, 2012, 第5版), p. 105) (斜体筆者)

斜体部は, 乾燥した豆の古さを高く (もしくは, 肯定的に) 捉えている。よっ

て、この部分を「同じくらいの古さ」と解釈することは正確とは言えない。なぜなら、そのような解釈の下では、豆は墓自体よりも新しいこともあり得てしまうからである。

次の例は、女性語研究のパイオニアとされる『言語と女性の地位』(*Language and Women's Place*)の論評付き拡大版(2004)(初版は1975年に出版)からの実例である。この書は、女性語に関する古典的著作であり、1975年に出版されて以来、言語とフェミニズムに大きな影響を与え続けてきた。

- (54) *Language uses us as much as we use language. As much as our choice of forms of expression is guided by the thoughts we want to express, to the same extent the way we feel about these things in the real world governs the way we express ourselves about these things. Two words can be synonymous in their denotative sense, but one will be used in case a speaker feels favorably toward the object the word denotes, the other if he is unfavorably disposed. Similar situations are legion, involving unexpectedness, interest, and other emotional reactions on the part of the speaker to what he is talking about.*

(Lakoff (2004: 39)) (斜体筆者)

(言語は、私たちがそれを用いるのと同程度には、私たちを用いている。表現形式の選択の仕方は私たちが表現したい思考によって導かれているのであるが、少なくともそれと同程度には、現実世界における事物に関する私たちの感じ方もまたこうした事物に関しての私たちの自己表現の仕方を支配しているのである。二つの語が同一の外延的(もしくは、指示的意味)を有している場合があるが、その語が指示する事物に対して話し手が好意的に感じている場合には一方の語が用いられ、そうでない場合にはもう一方の語が用いられる場合がある。)

斜体部の最初の文に “x as ... as y” の公式を当てはめるならば、以下のようになる。

(55)

x = language uses us  
as much as  
y = we use language (d-much)

ここで重要なことは、y (= 私たちが言語を用いること) が私たちの間の共有知識であるということである。そして、著者は、その程度に負けず劣らず x (= 言語が私たちを用いている) が成り立つと述べている。

斜体部の次の2番目の文に “x as ... as y” の公式を当てはめるならば、以下のようになる。

(56)

as much as  
y = our choice of forms of expression is guided by the thoughts we want to  
express (d-much)  
to the same extent  
x = the way we feel about these things in the real world governs the way we  
express ourselves about these things language uses us

ここでもまた重要なことは、y (= 表現形式の選択の仕方は私たちが表現したい思考によって導かれていること) が私たちの間の共有知識であるということである。すなわち、一般には、私たちの「考え方」が言語形式を選択していると考えられている。しかし、著者は、その程度に負けず劣らず x (= 現実世界における事物に関する私たちの感じ方がそれに関する私たちの自己表現の仕



方を支配していること) が成り立つと述べている。

上で挙げたレイコフの主張には、1970年前後に言語学で打ち出された「生成意味論」(generative semantics)の立場が反映している(Lakoff(2004: 104))。すなわち、言語形式は、決して自律的存在ではなく、その意味内容や、現実世界の状況や事物に対する話者の心的態度・捉え方(例えば、恩恵、好悪感情、ポライトネス、支配・被支配など)に直接影響された実体であるという想定である。

### 注

\*本稿は、2018年3月14日～15日に関西外国語大学で開催された「国際モダリティワークショップ——モダリティに関する意味論的・語用論的研究——」(第13回)で発表した口頭発表に加筆修正を加えたものである。有益なコメントをいただいた参加者の方々に深く感謝したい。とりわけ、参加者の一人であった久保進教授は本ワークショップ設立当初からのメンバーであり、今日までワークショップを支えていただいている。毎回、斬新なアイデアを発表され、他の方々の発表に対しても多くの有益なコメントを与えられる。久保教授に心から感謝すると共に、今後のご健勝を祈念するものである。

- 1) Sawada(2013)では、「は」の機能の一つとして、「尺度的な対比的「は」」(scalar contrastive *wa*)が提案されている。
- 2) “x as ... as y”構文の後ろに生起する「付け足し」表現は、レベルを上げてもいいが、レベルを下げてはならないという原則を述べた。では、以下の例はこの原則に違反しているのだろうか。

- (i) a. This swimming pool is *half as wide as* it is long, if not *narrower*. (このスイミングプールは横幅が縦の長さの半分ほどしかない。へたするともっと狭いかもしれない。)
  - b. ?This swimming pool is *half as wide as* it is long, if not *wider*. (このスイミングプールは横幅が縦の長さの半分ほどしかない。へたするともっと広いいかもしれない。)
- (Rusiecki (1985: 154))

実は、これらの例は上の原則の反例とはなり得ない。なぜなら、この場合、程度詞 *as* を修飾しているのが *half*(=半分)という分数であるために、横幅の狭さが強調されて、if notに率いられた「付け足し」表現は「狭さのレベル」を上へ上げているのである(Rusiecki(1985: 156)参照)。

3) (36a)について, Rett (2015: 80) は, 下の例を挙げて, (36a)は(36b)と同義に解釈できるとしている。

(i) Adam is not as tall as Doug, he's taller.

4) 次の例の意味は「田舎の雪景色ほど, 見て心安らぐものはない」であり, 「田舎の雪景色」の優位性を述べている。

(i) Nothing looks so peaceful as a country snow scene. (江川 (1991: 168))

### 参 考 文 献

- Bolinger, Dwight (1972) *Degree Words*, Mouton De Gruyter, The Hague.
- Bresnan, Joan (1973) "Syntax of the Comparative Construction in English," *Linguistic Inquiry* 5, 614-619.
- Campbell, R. N. and R. J. Wales (1969) "Comparative Structures in English," *Journal of Linguistics* 5, 193-320.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha, Tokyo.
- 江川泰一郎 (1991<sup>3</sup>) 『英文法解説』金子書房, 東京.
- Huddleston, Rodney (1984) *Introduction to the Grammar of English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Lakoff, Tolmach Robin (2004) *Language and Women's Place: Text and Commentaries* (Revised and Expanded Edition edited by Mary Bucholtz), Oxford University Press, Oxford.
- Larsen-Freeman, Diane and Marianne Celce-Murcia (2016<sup>3</sup>) *The Grammar Book: Form, Meaning, and Use for English Language Teachers*, National Graphic Learning, Boston.
- Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Levinson, Stephen C. (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicatures*, MIT Cambridge Press, Cambridge, MA.
- Mitchell, Keith (1990) "On Comparisons in a Notional Grammar," *Applied Linguistics* 11-1: 52-72.
- Murphy, Raymond (2009<sup>3</sup>) *Grammar in Use Intermediate*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rett, Jessica (2015) *The Semantics of Evaluativity*, Oxford University Press, Oxford.
- Rusiecki, Jan (1985) *Adjectives and Comparison in English*, Longman, London.
- 澤田治美 (2014) 『現代意味解釈講義』開拓社, 東京.
- 澤田治美 (2018a) 『意味解釈の中のモダリティ』(上) 開拓社, 東京.

澤田治美 (2018b) 『意味解釈の中のモダリティ』(下) 開拓社, 東京.

澤田治美 (2018c) 「意味論・語用論を活かした英語の授業——“x as ... as y” 構文の意味解釈をめぐって——」『英語学を英語授業に活かす』池内正幸・窪菌晴夫・小菅和也(編), 35-54, 開拓社, 東京.

Sawada, Osamu (2013) “The Japanese contrastive wa: a mirror image of EVEN,” *BLS* 33: 374-387.

Sawada, Osamu (2018) *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface*, Oxford University Press, Oxford.

Swan, Michael (2005<sup>3</sup>) *Practical English Usage*, Oxford University Press, Oxford.

八木孝夫 (1987) 『程度表現と比較構造』大修館書店, 東京.